母親の心

暮れも近づく大掃除、何時(いつ)もは使わない書棚の隅から、埃(ほこり)にまみれた白い丸筒(まるづつ)に入った巻紙が出てきました。

もう３０年も前のこと、子ども連れで、猪苗代湖畔の野口英世の生家を訪ねた時に買った母親のシカさん自筆の手紙の写しです。あるいは、子どもの頃、祖父が食卓で感慨深げにこの手紙のことを話していたことも思い出したりしますと、箱の汚れ具合いから、もっとはるか前に祖父が求めたものかも知れません。

紙も筆も簡単には手に入らなかった時代、アメリカのロックフェラー医学研究所にいる息子の野口博士に手紙を送りたい一心で、囲炉裏(いろり)の灰を手習い草子(ぞうし)にして、粗朶(そだ)や火箸(ひばし)で一生懸命に字を習ったというシカさんの、本当にカタコトの日本文、当て字あり、ひらがな・カタカナ・句読点綯い交ぜになった拙い文章です。

おまえ(おまエ)の。しせにわ(出世には、)。みなたまけ(げ)ました。わたくしもよろこんでを(お)りまする。なかた(中田)のかんのん(観音)さまに。さまに(さまに重複)　ねん(毎年、)。よこもり(夜籠り)を。いたしました。べん京(勉強なんぼ)なぼでも。きりか(が)ない。　―中略―　はる(春)になる ト(と)。みなほかいド(北海道)に。い(行って)てしまいます。わたしも。こころぼそくありまする。ドか(どうか)はやく。きてくだされ。　―中略―　はやくきてくた(だ)され。はやくきてくたされはやくきくたされ。はやくきてくたされ。いしょ(一生)のたのみて(で)。ありまする。にし(西)さむいてわ(は)。おかみ(拝)。ひかし(東)さむいてわおかみ。しております。きた(北)さむいてわおかみおります。みなみ(南さ)たむいてわおかんておりまする。　―中略―　なにお(を)わすれても。これわすれません。さしん(写真を)おみるト。いただいておりまする。はやくきてくたされ。いつくるト　おせ(教え)てくたされ。これのへんち(返事)　ち(ち重複)　まちてをりまする。ねてもねむられません　　（明治４５年１月２３日付け）

この手紙に感激して、誰にでも手に入る印刷物にして、広く読めるようにすることを勧めたのは、かつて日ソ漁業交渉や日中交流事業等に尽力した高碕達之助代議士だそうで、この巻紙には、更に高碕氏の感想が添えられておりました。

「極めて稚拙な筆で精一杯努力して書かれたこのたど～しい手紙には、天衣無縫の母の愛が一字一字に、にじみ出ていて、照合しつゝ読んで行くうちに、私はとめどもなく涙が出てこまりました。極貧の農家に生まれ、幼いうちに両親に別れ、信心深い祖母の手一つで育てられたシカ女、７才で他家に雇われ、終日子守や野良仕事に追い廻され、人が寝静まってから月明りに指で木灰にいろはを書き習ったと云われる彼女、想像も及ばぬ辛苦を重ねつゝ

も、ひたすら観音の教えを信じて逆境に耐えぬいたこの母が、博士の成功を祝し、その身を案ずる真心で書き綴ったこの手紙は正に鬼神をも泣かしめる天下の名文といえましょう」。

高碕氏の感想に全ては尽くされていますが、「西さ向いては拝み」「東さ向いては拝み」「早く帰って来て下され」「早く帰って来て下され」と繰り返される文章は、詩の韻律のような美しい響きさえ帯びて、たとえ時代を遠く離れ、生活は様変わりしても、今の私達の胸にも沁みわたる母親の心です。

＞前のページへ戻る